

他尊感情および自尊感情とスポーツ行動規範との関係性

The Relationships between Other-Esteem, Self-Esteem
and Behavioral Norms in Sports Games for University Students

遠藤俊郎 星山謙治* 袴田敦士**

Toshiro ENDO Kenji HOSHIYAMA Atsushi HAKAMATA

安田貢*** 下川浩一** 布施洋** 伊藤潤二**

Mitsugu YASUDA Koichi SHIMOKAWA Hiroshi FUSE Junji ITO

1 緒言

肯定的な感情評価を表す「自尊感情」が高い人ほど向社会的行動を取りやすく良好な人間関係を築くなど様々な望ましい特徴と結びつくことが示されている (Rosenbrg, 1965)。現在に至っても自尊感情との関連についての研究はおとろえることなく行われており、このことは自尊感情という概念に対する関心の高さとその重要性を如実に表している。

しかし、自尊感情が高ければポジティブな面が促進されネガティブな面が抑制されると考えられている一方、自尊感情を高めることは攻撃性の抑制には必ずしも繋がらないなどの問題点の指摘もでてきていることは否めない。

例えば、Baumeisterら (1996) は、多くの犯罪者たちが非常に高い自尊感情を持っていることを示唆している。犯罪者の自尊感情と暴力との関係に焦点をあてた調査結果から、低い自尊感情の人よりも高い自尊感情を持っている人の方が暴力の原因を作り出すと結論づけた。また、高い自尊感情を持った人は、自分を持ち上げるために他人をたたきつぶすことに対して何の気の咎めを持たず自分の優越や優勢を証明したり守ったりするときに他人に与える害は気にしないことを明らかにしている。自分たちとは異なったり劣ったりする人への軽蔑の感情があること、すなわち他者を評価し尊敬することの欠如が懸念されるべき問題である (Baumeister, 2001)。

このような指摘を受けてHwang (2001) は、自尊感情の過度の促進を問題とし、他者との関係の中で生活するための新しい態度として「他尊感情」を獲得する必要があると主張している。他尊感情と自尊感情のバランスに重点を置くべきであると主張している。他尊感情という視点を取り入れることによって自尊感情という一方向性のもとに他者を受け入れるといったもう一方の方向性が自己の内的特性として加わり、新たな視点から知見が得られるものと思われる。

したがって、自尊感情と同時に他尊感情を向上させる方策の検討が必要となる。さらには他尊感情という概念からの検討が必要ということで他者及び自分自身を尊重するという態度評価に重点を置き、その心的態度から他尊感情及び自尊感情向上を促すようなアプローチが必要である。それは尊重するという態度が健全であれば自己の形成にプラスの作用が働くと考えられるからである。

そこで、本研究ではスポーツ場面においてスポーツパーソンシップという一般的に用いられている態度・規範があるように、スポーツ活動における行動規範に注目した。スポーツにおける行動規範は、端的に言い表らわすと「尊重する」という態度である。スポーツにおいては1)相手 2)審判 3)ルールを尊重することが必要だと言われるように規範態度が求められている (広瀬、2005)。このことか

*岡崎市少年自然の家 **教育学研究科修士課程 **大学院博士課程

らスポーツ場面における自己への期待・感情の抑制・相手に対する思いやり・公正に戦うことなどのスポーツパーソンシップに代表されるような規範態度が、他尊感情及び自尊感情に影響を与える大きな要因であると推測することができる。

以上の点を踏まえ、本研究では他尊感情及び自尊感情を向上させる要因としてスポーツ行動規範が妥当であるか検討し、関係性を明らかにすることを目的にした。

2 研究方法

(1) 調査期間

平成 18 年 11 月 25 日～平成 18 年 12 月 17 日

(2) 調査対象

T 大学、W 大学、Ya 大学、Yb 大学、に所属する男女大学生 385 名に調査用紙を配布した。回収された質問紙は 378 部 (回収率 98.2%) であった。その内、各尺度について無回答項目があったものと全項目同一ポイントに回答したもの (32 部) を除外し、最終的に 346 名 (男子 172 名、女子 174 名、平均年齢 20.0 ± 1.40 歳) を分析の対象とした。

(3) 調査内容

目的は包括的な態度測定を狙いとしているため質問紙による調査を実施した。インフォームド・コンセントに関わる教示を与え、本調査の主旨に対する理解を得た者のみ回答するように指示した。質問紙の調査内容は以下に示す通りである。

1) 他尊感情尺度

Hwang (2000) が提唱する自尊感情の 10 側面を参考に石川ほか (2005) が作成した 1 因子構造 11 項目の他尊感情尺度を用いた。石川ほか (2005) は、Hwang (2000) が提唱した自尊感情の 10 側面のうち行動的側面を含むことは適切でないと考えて 3 つの行動的側面の項目を削除して 7 つのカテゴリー (非攻撃的・誠実・親切・価値のある・受け入れる・他者を奨励する・許す) に分類して構成をしている。他尊感情尺度の 11 項目は、項目作成時の 7 つのカテゴリーの中から少なくとも 1 つは抽出されている。より個人の内側に存在する属性を測定する尺度が作られたことから、①他者を尊重する側面を包括的に含む評価的概念であること、②人格と同様、人の内側に存在する特性であること、という 2 つの側面の内容を踏まえた尺度であると考えられる。そして、「1. 全くあてはまらない」「2. あまりあてはまらない」「3. どちらともいえない」「4. だいたいあてはまる」「5. あてはまる」の 5 件法で回答が求める形式とした。

2) 自尊感情尺度

Rosenberg (1965) の尺度は、自尊感情測定の最も代表的な尺度の 1 つとされており一般的な自尊感情を測定できることが特徴となっている。本研究では、Rosenberg (1965) の作成した Self-esteem 尺度の翻訳版 (山本・松井・山成、1982) を用いた。この尺度は、「少なくとも人並みには、価値のある人間である」、「いろいろよい素質をもっている」などの記述で 10 項目から構成されている。個人の内的特性を包括するものであるため 1 因子構造で解釈される。そして「1. 全くあてはまらない」「2. あまりあてはまらない」「3. どちらともいえない」「4. だいたいあてはまる」「5. あてはまる」の 5 件法で回答を求める形式とした。本尺度は高い信頼性と妥当性が確認されている。

3) スポーツ行動規範尺度

賀川ほか（1986）の作成したスポーツ行動規範尺度を用いた。小学生から大学生までを対象にしておりスポーツにおける「良い行為」「悪い行為」についての 29 項目から構成されている。質問紙を作成するため賀川ほか（1986）は、自由記述法によって意見を集めた 1 次調査用紙を因子分析によって 49 項目に精選した。さらに 2 次調査を男子 1638 名、女子 1655 名に実施して有意性が認められた 29 項目をスポーツ行動規範尺度とした。スポーツ行動規範の全 29 項目は、6つの因子（スポーツ・エゴ、生まれめさ、礼儀、情緒的興奮、アピール、親睦）から構成されており「1. 全くあてはまらない」「2. あまりあてはまらない」「3. どちらともいえない」「4. だいたいあてはまる」「5. あてはまる」の 5 件法で回答を求める形式とした。

スポーツ行動規範尺度は、得点の高いほどスポーツ場面での行動規範が高いことを示しているが対象によって判定の点数が異なることを示している。なおその後の研究で行われた発達段階や性別の検討から測定内容に対する妥当性が認められている（賀川ほか、1991）。

(4) 調査の実施手順

調査の協力を依頼して承諾を得た学校に調査者または調査者代りが質問紙を持参して調査を実施した。調査の実施場所と時間は、調査対象者の事情に合わせて任意に決定されるものとした。

(5) 回収されたデータの分析方法

本研究で得られたデータの統計処理は、すべて表計算ソフト「Microsoft Excel for XP」、及び統計解析ソフト「SPSS 10.00 for Windows」によって行われた。

3 結果

(1) 他尊感情について

他尊感情尺度の構造を確認するために主成分分析を行った。第 1 成分の寄与率は 38.44% であり、第 2 成分の寄与率は 11.46% であった。第 1 成分の寄与率が高いため本研究では、石川ほか（2005）の先行研究と同様に次元性のもので解釈をした。第 1 成分への負荷量が低かった項目 1 のみを削除して再度主成分分析を行ったところ、全ての項目が第 1 成分（寄与率 41.86%）に高い負荷量を示した（表 1）。よって他尊感情尺度は項目 1 を除いた 10 項目を使用して得点を算出し、その後の分析を行うことにした。

内的整合性を検討するためにクロンバックの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .81$ と満足な値が得られ、十分な信頼性が認められた。

表 1 他尊感情尺度（10項目）に関する主成分分析の結果

No.	項目 (n=346)	負荷量	共通性
9	私は、人が目指している目標を応援しようと思う	.73	.60
2	私は、人の個性の違いを理解し、それぞれに価値があると思う	.70	.57
3	私は、どんな人も生まれてきた以上は価値があると思う	.69	.69
6	私は、相手と共に喜び合う事を大切にする	.69	.48
11	私は、相手が傷つくようなことはしたくない	.66	.53
7	私は、人に対して、常に親切でいようとする	.65	.49
4	私は、誰にでもその人が一番輝ける場所があると思う	.61	.70
8	私は、人は誰でも失敗するし、失敗する事は悪くないと思う	.61	.44
10	私は、他人に対して謙虚な姿勢でいたいと思う	.61	.56
5	私は、人間には優劣がないと思う	.48	.32
説明率 (%)		41.86	
信頼性係数 (α 係数)		.81	

(2) 自尊感情について

自尊感情尺度の 1 因子構造を確認するために主成分分析を行った。第 1 成分の寄与率は 39.51% であり、次いで 12.56%（第 2 成分）、10.50%（第 3 成分）であった。第 1 成分の寄与率が高いため本研究では、山本ほか（1982）が指摘しているように次元性のもので解釈をした。第 1 成分への負荷量が低かった項目 8 のみを削除して再度主成分分析を行ったところ、全ての項目が第 1 成分（寄与

率 43.89%) に高い負荷量を示した (表 2)。よって自尊感情尺度は項目 8 を除いた 9 項目を使用して得点を算出し、その後の分析を行うことにした。内的整合性を検討するためにクロンバックの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .78$ とほぼ満足な値が得られて十分な信頼性が認められた。

表 2 他尊感情尺度 (9 項目) に関する主成分分析の結果

No.	項目 (n=346)	負荷量	共通性
10	何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う	.75	.60
9	自分は全くだめな人間だと思うことがある	.69	.65
2	色々な良い素質をもっている	.68	.72
5	自分には、自慢できるところがあまりない	.68	.47
6	自分に対して肯定的である	.68	.49
7	だいたいにおいて、自分は満足している	.67	.50
3	敗北者だと思うことがある	.65	.62
1	少なくとも人並みには、価値のある人間である	.62	.64
4	物事を人並みには、うまくやれる	.51	.47
説明率 (%)		43.89	
信頼性係数 (α 係数)		.78	

(3) 他尊感情及び自尊感情の分析結果について

他尊感情及び自尊感情について性別間、学年間及び競技種目間 (個人競技、団体競技、大学でスポーツを行っていないもの) において得点に差が見られるか t 検定または一元配置による分散分析を行った。その結果、性別において自尊感情得点に違いがみられ (表 3)、男子のほうが女子よりも統計的に有意に高い値であった。従って本研究の対象者において男子のほうが女子よりも自尊感情得点が高いことが明らかになった。

また、有意な差は認められなかったものの自尊感情の競技種目間において大学でスポーツを行っていない者は自尊感情得点が低い傾向がうかがえた (表 4)。これは、定期的な運動・スポーツを行っている

ものほど高い自尊感情を有する (杉本・杉原, 1994) ことを裏付ける結果であった。

(4) スポーツ行動規範の因子構造について

今日におけるスポーツ行動規範尺度の因子構造が賀川ほか (1986・1991) による先行研究と異なる可能性も考えられるため、どのような因子から構成されているのかを再検討する必要がある。そこでスポーツ行動規範尺度について探索的因子分析 (主因子法・Promax 回転) を実施した。その結果、スポーツ行動規範尺度としては 28 項目を使用し、分析

表 3 他尊感情得点の記述統計と性差

	N	M	SD	df	t 値
全体	346	28.45	6.25		
自尊感情					
男子	172	29.26	6.45	344	2.42 *
女子	174	27.64	5.96		

* $p < .05$

表 4 他尊感情得点における種目別一元配置分散分析の結果

	N	M	SD	F 値
なし	133	27.04	6.18	
競技種目				
個人	100	29.38	6.06	2.49 †
団体	113	29.28	6.25	

† $p < .10$

表 5 スポーツ行動規範尺度に関する因子分析 (主因子法、Promax 回転、値は因子負荷量) の結果

No.	項目 (n=346)	I	II	III
9	反則されたらやり直す	.70	.05	-.03
13	相手からやじられたら、やじり返す	.63	-.07	.03
19	相手から反則されると、すぐカットとなる	.61	-.06	.08
26	試合や練習中、自分だけ目立とうとする	.60	-.10	.01
28	反則されたとき、あとあとまでそのことを恨む	.57	.07	.04
17	失敗した人に文句を言う	.55	-.02	.10
4	自分が反則をとられたら、審判に文句を言う	.55	-.01	-.02
25	試合に勝ったとき、その相手を馬鹿にする	.53	.15	-.04
8	相手を甘くみて、いいかげんなプレイをする	.51	.21	-.05
27	他の人の反則を見つけたら、そのことを審判にうったえる	-.50	.01	.18
23	試合に負けたとき、負け惜しみを言う	.49	.08	.00
22	自分が勝ったことを他の人に自慢する	.46	-.02	.04
21	自分が反則をされたら、すぐそのことを審判にうったえる	.43	-.09	-.18
2	自分が負けたとき、それを審判のせいにする	.41	-.00	.06
12	相手が勝ちはじめたら、なにかタイミングをはずすことをする	.40	-.22	-.00
20	勝っても負けても、次の試合にそなえて練習を続ける	.03	.71	-.18
29	試合のため、日頃から準備をしておく	-.01	.63	-.013
18	勝てないとわかっている試合でも、最後までがんばる	.24	.57	.02
1	応援してくれた人にお礼を言う	.01	.47	.14
5	へたな人に教えてあげる	-.17	.46	.18
7	自分たちが勝ったとき、味方の協力に感謝する	.05	.45	.20
24	相手チームにも応援する	-.19	-.01	-.59
11	負けた相手になぐさめの言葉をかける	-.15	-.20	.58
10	相手が一生懸命プレイしたことをほめたたえる	-.00	.23	.52
15	反則した人に注意をしてあげる	-.23	-.01	.47
14	勝っても負けても、明るくふるまう	.24	-.21	.46
3	相手の人と、試合がおわったあとで仲良くする	.00	.13	.44
6	失敗した人を元気づけてあげる	.07	.22	.42
固有値		5.29	3.56	2.01
説明率 (%)		18.91	31.63	38.82
信頼性係数 (α)		.85	.69	.69

を行うことにした (表5)。

次いで抽出された因子の命名を行なった。第1因子は、15項目から構成されている。これは、賀川ほか (1986) の先行研究における「スポーツ・エゴ」「情緒的興奮」「アピール」の3因子を包括しているものであった。よって賀川ほか (1986) の名称を参考にして「主張行為」と命名した。

第2因子は、6項目から構成されている。これは賀川ほか (1986) の先行研究における「生まじめさ」「礼儀」の因子要素を含んだものであった。よって賀川ほか (1986) の名称を参考にして「向上心」と命名した。

第3因子は、7項目から構成されている。これは賀川ほか (1986) の先行研究における「親睦」「礼儀」の因子要素を含んだものであった。よって賀川ほか (1986) の名称を参考にして「敬意」と命名した。

5. スポーツ行動規範各因子毎の分析結果について

スポーツ行動規範実態を知るために3因子「主張行為」、「向上心」、「敬意」における性別間、競技水準間 (国際、全国、ブロック、都道府県、市町村)、競技歴間 (競技歴が長い者をH群、競技歴が短い者をL群)、競技形態 (身体接触あり、なし) に得点に差が認められるか t 検定および二元配置による分散分析を行った。

その結果、性別間において、女子のほうが男子よりも統計的に有意に高い値であった (表6)。なお「主張行為」、「向上心」「敬意」の各因子において女子のほうが男子よりも有意に高い値であったのは、「主張行為」と「敬意」であった。

従って本研究の対象者において女子のほうが男子よりもスポーツ行動規範得点が高いことが明らかになった。

表6 スポーツ行動規範得点及び下位尺度得点の記述統計と性差の検討

		性差				
		N	M	SD	df	t 値
スポーツ行動規範	男子	172	100.85	9.84	344	6.61 ***
	女子	174	107.57	9.09		
主張行為	男子	172	3.79	0.99	344	6.25 ***
	女子	174	4.13	0.99		
向上心	男子	172	4.03	0.92	344	1.73 n.s.
	女子	174	3.91	0.92		
敬意	男子	172	2.82	1.00	344	5.22 ***
	女子	174	3.15	0.99		

*** p < .001

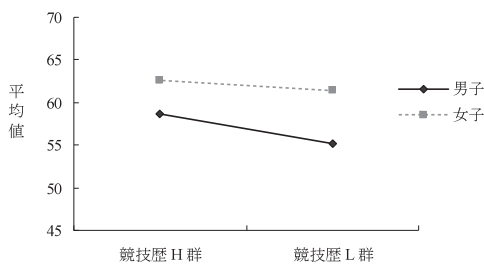


図1 スポーツ行動規範下位尺度得点—主張行為における競技歴、性差の比較

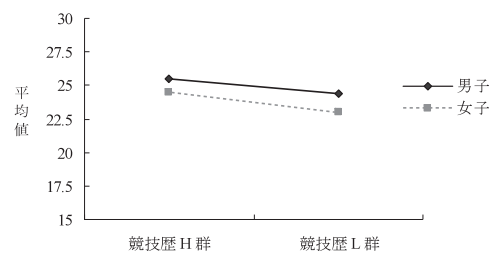


図2 スポーツ行動規範下位尺度得点—向上心における競技歴、性差の比較

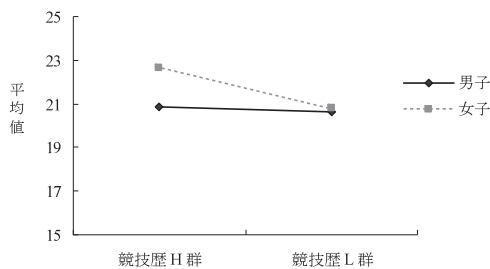


図3 スポーツ行動規範下位尺度得点—敬意における競技歴、性差の比較

また、性別及び競技歴間において各群間の差を検討するために主張行為得点を従属変数とした競技歴 (H 群、L 群) × 性別 (男子、女子) の 2 要因分散分析をした。その結果、スポーツ行動規範尺度の全ての下位因子で H 群の得点が有意に高かった。(図 1・2・3)。なお、スポーツ行動規範尺度の 3 因子「主張行為」、「向上心」、「敬意」ごとに競技種目間、競技水準間においては有意な差がみられず、違いが見られなかった。

6. スポーツ行動規範と他尊感情及び自尊感情の関連

1) 各尺度間の相関関係

スポーツ行動規範尺度と他尊感情尺度及び自尊感情尺度がどのような関係をもっているのかを明らかにするために各尺度間について Pearson の積率相関関係を検討した。その結果、表 7 に示したように、主張行為と向上心、主張行為と自尊感情の間で低い相関係数が得られ、主張行為と他尊感情、向上心と敬意、向上心と他尊感情、向上心と自尊感情、敬意と他尊感情、他尊感情と自尊感情において中程度の相関係数が得られた。

表 7 各尺度間の積率相関関係

	1	2	3	4	5
1. 主張行為		-.113 *	.043	.247 **	-.108 *
2. 向上心			.301 **	.235 **	.195 **
3. 敬意				.307 **	.058
4. 他尊感情					.187 **
5. 自尊感情					

* p < .05 ** p < .01

2) スポーツ行動規範が他尊感情及び自尊感情に及ぼす影響

スポーツ行動規範尺度の各因子が他尊感情及び自尊感情にどのように影響しているのかを検討するためにスポーツ行動規範の各下位尺度得点の 3 変数を説明変数、他尊感情得点及び自尊感情得点を基準変数とした多変量重回帰分析を実施した (図 4)。他尊感情に対しては主張行為、向上心、敬意の下位因子の全てが正の有意な値を示した。自尊感情に対しては主張行為が負の有意傾向な値を示し、向上心が正の有意な値を示していた。

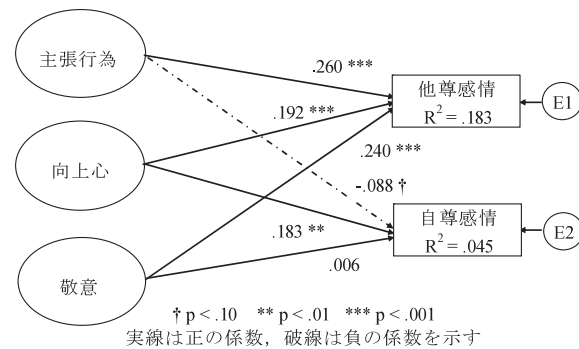


図 4 スポーツ行動規範下位因子が他尊感情・自尊感情に与える影響における多変量重回帰分析結果

4 考察

(1) 他尊感情の実態

性別について検討した結果、他尊感情得点には性差がみられなかった。石川ほか (2005) は、女子のほうが人間関係の関与が強いことや共感性の概念が高いことと関連付けて考察をしている。また鈴木 (1992) も女子のほうが男子よりも共感性が高く、人への援助行動が多いことを示している。しかし、このことが他者評価の関連と直接結びつく確証があるとは言えない。Rosenberg (1965) は、自尊感情には一般的には性差がみられないことを指摘しているため自己評価と並列の概念と考えられる他尊感情も性差はみられないということも考えられるだろう。従って他尊感情と共感性の関係を明確にするなど今後さらなる検討が必要である。

(2) 自尊感情の実態

性別について検討した結果、自尊感情得点は女子よりも男子のほうが高い値を示した。自尊感情の性差について山本ほか (1982) は、男子と女子の間で自己評価過程の側面に違いがみられることから生じることを示唆している。認知側面において、男子の場合自己認知の側面で自尊感情に最も強く寄

与しているものは「生き方」と「知性」であった。それに対して女子は「優しさ」と「変貌」の側面が高い重要度を示した。このように性別によって重要視する認知側面に大きな違いがあることがうかがえる。性差が生まれる背景には、男女が「こうありたい」と望む理想像の違いが自尊感情に影響しているものと考えられる。また競技種目の違いも自尊感情の側面については同様のことがいえる。運動・スポーツを行うことに重点を置いていない者は、スポーツを行っていても行っていないでも自尊感情に変化はなかった。このことは、前述した「自尊感情には自己に対する満足と不満足との2つがある」という James (1890) の理論の妥当性を示唆しているものであり自尊感情の根本ともいえるものだと考えられる。

ところで興味深いことに本研究では、運動・スポーツを行っていない者の自尊感情が低い値を示していた。杉本・杉原 (1994) は、定期的な運動・スポーツを行っている人ほど高い自尊感情を有することを示しておりスポーツを行っていない者との差があることを示唆している。つまり一般的に自尊感情を向上させようという方策には、運動・スポーツの介入が有効であるということの裏付けだと考えられる。特に運動・スポーツを行っていない者への期待効果は大きいことが推測できる。運動・スポーツの介入方策研究の更なる検討が望まれる。

(3) スポーツ行動規範の実態

性別について検討した結果、スポーツ行動規範得点は男子よりも女子のほうが高い値を示していた。米川ほか (1981) の研究と同様の結果であり、男子よりも女子のほうがスポーツゲームにおける行動規範は望ましい方向に形成されるということが明らかになった。このことは男女のスポーツ特性の違いから派生していることが考えられた。

スポーツは元来男子だけが行っており次第に女子が行うことが認められた背景がある。今日、スポーツパーソンシップと言われているが、その元となっている「スポーツマンシップ」という言葉自体は、対象を「男子」として捉えている。スポーツにおけるルールが男子を基準として作られたことから考えると、男子を基準としたスポーツマンシップ概念が女子に求められていることになる。そのため後にスポーツに参加した女子の競技行為が謙虚に行っているように捉えられるのかもしれない。いずれにしろ推測の域を脱しないため、明確な見解とは言えないであろう。

スポーツ行動規範は、種目別や競技水準別では差がみられなかった。因子別に検討しても具体的に差はみられなかったことから種目や競技水準は大きな要因となりえないことが見出された。本研究における競技種目の検討は、団体種目と個人種目という分類のみであったため種目の特性が十分反映されていないという欠点もあるだろう。特にルールぎりぎりのところで審判にわからないように競技するのも戦術の一つであるという種目では、相手や審判をごまかす行為をするのは当然なのかもしれない。各種目の特性でスポーツ行動規範が変容することが推測されるため今後の課題として挙げられる。

性別及び競技歴間において各群間の差の検討では、主張行為、向上心、敬意全ての項目において統計的に有意な差がみられ競技歴の短い者よりも長い者の方がスポーツ行動規範が高いことを示していた。競技歴の長い者ほどスポーツ行動規範が高くなるというのは妥当な結果だと思われる。運動・スポーツ場面において、自信・劣等意識・競争心・動機づけなどが混在するものでありその中の葛藤から発達の成長も遂げていくことが予想される。運動・スポーツを行うことでその様々な特性から自己を知る機会が与えられることに起因しているものと思われる (松田、1979)。

(4) 他尊感情及び自尊感情とスポーツ行動規範との関連

スポーツ行動規範の各因子である、「主張行為」、「向上心」、「敬意」が他尊感情及び自尊感情にどのように影響を及ぼしているのかを検討した。相関係数においてスポーツ行動規範の各因子は、他尊感情

及び自尊感情に有意な値を示したこともあり、その関係性の高さを表している。スポーツ行動規範の各下位尺度得点の 3 変数を説明変数、他尊感情得点及び自尊感情得点を基準変数とした多変量重回帰分析を実施した結果、他尊感情に及ぼす影響と自尊感情に及ぼす影響には違いがみられた。従って他尊感情及び自尊感情とスポーツ行動規範には因果関係があることが明らかになった。

「主張行為」、「向上心」、「敬意」全ての項目は他尊感情に有意な正の係数を示しており影響を与える大きな要因であることがうかがえた。スポーツ行動規範は、自分や相手、審判さらにはルールを尊重する態度を示すものであり、他者を尊重することに影響を及ぼしている結果であると考えられる。松田 (1979) は、スポーツ場面での行動が日常での行動にどう転移していくのかわからないことを危惧していたが、他尊感情に正の効用を示したという本研究の結果は新たな知見である。意図的に転移させる方法とも関連してスポーツ行動規範を高める方策を練ることが今後の課題である。

しかし自尊感情との関連では、各成分からの影響は一貫性がみられなかった。「向上心」は自尊感情に有意な正の影響を与えており、「敬意」は自尊感情に影響を与えていないことが示された。しかし「主張行為」は自尊感情を減少させる傾向にあることを示しており自尊感情向上には弊害となる態度になることが示唆された。主張行為は感情を抑える態度という解釈もできるようにその抑制は、自分自身をポジティブにみる肯定的な態度評価には繋がらないということである。Hwang (2000) は自尊感情の過度の促進を問題とすべきと述べているように自尊感情抑制も必要なかもしれない。一方自分の主張を抑制するのも本当に健全かどうかは判断の分かれるところである。自己表現は、そのときの自分の気持ち・考え、相手の気持ち・考えを同時に大切にしていくことが最も適切な表現方法と指摘されているように、バランスのとれた態度をとることの認識が必要である (石川ほか, 2005)。

5 結論

1. 他尊感情の実態に関して

他尊感情は、性別や学年、運動・スポーツ活動によって差はみられないことが明らかとなった。個人の他尊感情は他の環境要因の影響を受けているという可能性が示唆された。

2. 自尊感情の実態に関して

自尊感情は、性別や学年、運動・スポーツ活動によって差が生じるという可能性が示唆された。各々の環境要因の認知の程度によって影響を及ぼす可能性がある。

3. スポーツ行動規範尺度に関して

スポーツ行動規範尺度は 3 因子構造の可能性が示唆された。スポーツパーソンシップ概念を包括しているスポーツ行動規範は時代変化につれ見解が異なるという可能性が示唆された。

4. スポーツ行動規範の実態に関して

①スポーツ行動規範は、男子よりも女子のほうが高いことが明らかになった。男女のスポーツ特性から規範意識に違いが生じている可能性が示唆された。

②スポーツ行動規範は、競技歴の短い者よりも長い者のほうがスポーツ行動規範が高いことが明らかになった。競技を長く行うことで規範意識の発達も遂げていくことが示唆された。

5. 他尊感情及び自尊感情とスポーツ行動規範の関連に関して

①スポーツ行動規範の「主張行為」、「向上心」、「敬意」全ての項目は、他尊感情を向上させる大きな要因となることが明らかになった。従ってスポーツ行動規範を高めることで他尊感情の向上が期待でき望ましい自己を形成する可能性があることが示唆された。

②スポーツ行動規範の「向上心」は自尊感情を向上させる要因となり、「主張行為」は自尊感情を抑制させる要因となることが明らかになった。スポーツ行動規範の側面には自尊感情への影響が異なるものが見出されたため、スポーツ行動規範の要因別で自尊感情向上方策を練るべきであると示唆された。

6. 引用・参考文献

- Baumeister, R.F., Smart, L., & Boden, J.M. (1996) Relation of threatened egotism to violence and aggression : The dark side of high self-esteem. *Psychological Review* 103 : 5-33.
- Baumeister, R.F. (2001) Violent Pride. *Scientific American* 284 (4) : 96-101.
- 広瀬一郎 (2005) スポーツマンシップを考える. 小学館:東京.
- Hwang, P.O. (2000) Other esteem : Meaningful life in a multicultural society. Philadelphia : Accelerated Development.
- 石川満佐育・石隈利紀・濱口佳和 (2005) 他尊感情と自尊感情が自己表現に与える影響. 筑波大学心理学研究 29 : 89-97.
- James, W. (1890) *Principles of Psychology*. New York : Henry Holt.
- 賀川昌明・米川直樹・岡沢祥訓・石井源信 (1986) スポーツゲームにおける行動規範の研究—小・中・高・大学生に対する調査項目の作成とその尺度構成の試み—. *体育学研究* 30 (4) : 281-292.
- 賀川昌明・石井源信・岡沢祥訓・米川直樹 (1991) スポーツゲームにおける行動規範の研究—小学校体育授業における意識変容への実験的試み—. *鳴門教育大学研究紀要* 6 : 21-36.
- 松田岩男 (1979) *体育心理学*. 大修館書店:東京.
- Rosenberg, M.J. (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton : Princeton University Press.
- 杉本信・杉原隆 (1994) 有能感を高めるよう配慮されたジョギングが自己概念の変容に及ぼす影響. *スポーツ心理学研究* 21 : 14-22.
- 鈴木隆子 (1992) 向社会行動に影響する諸要因—共感性・社会的スキル・外向性—. *実験社会心理学研究* 32 (1) 71-84.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造. *教育心理学研究* 30 : 64-68.
- 米川直樹・石井源信・岡沢祥訓・賀川昌明 (1981) スポーツゲームにおける行動規範の研究—その発達傾向について—. *皇學館大學紀要* 25 : 99-107.